盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

レクチャーコンサート

マタイへの旅

-第２回-

5月6日（月・振休）

開場　13:30　開演　14:00

指揮・解説	**佐々木 正利**
オルガン	**劔持 清之**
福音史家（テノール）	**西野真史**
イエス（バス）	**小原一穂　小菅悠樹**
ユダ（バス）	**佐藤和久**
ソプラノソロ	**佐々木あかり**
アルトソロ	**在原泉**
テノールソロ	**伊藤陽平 田邉尚人**
バスソロ	**芳賀郁夫　横山泉**
ピアノ	**柿崎倫史**

主催・演奏

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

協賛

岩手銀行

第Ⅰ部

Nr.1　二重合唱 ＆ コラール

Kommt, ihr Töchter,	来なさい、娘たちよ、
helft mir klagen,	私の嘆き・訴えを聴いてください。
Sehet　－	見て下さい　－
Wen?	誰を？
den Bräutigam,	花婿を。
Seht ihn　－	彼を見て下さい　－
Wie?	どのような？
als wie ein Lamm!	子羊のような！

＜Choral＞　詞曲：ニコラウス・デーツィス 「 O Lamm Gottes unschuldig 」 第 1 節

O Lamm Gottes, unschuldig	おお、神の子羊よ、罪無くして
am Stamm des Kreuzes geschlachtet,	十字の幹に屠られた(御方よ)

Sehet,	見て下さい、
Was?	何を？
seht die Geduld,	彼の忍耐を見て下さい。

allzeit erfunden geduldig,	常に、企みにあっても、耐え忍ばれました。
wiewohl du warest verachtet.	あなたは、どんなに侮られたにもかかわらず。

Seht　－	見て下さい　－
Wohin?	どこを？
auf unsre Schuld;	私たちの罪を。

All' Sünd' hast du getragen,	全ての罪をあなたは背負われました。
sonst müssten wir verzagen.	さもなければ私達は絶望していたに違いありません。

Sehet ihn aus Lieb und Huld	彼を見て下さい。愛と慈しみの故に、
Holz zum Kreuze selber tragen!	十字の木柱を背負っている彼を！

Erbarm dich unser, o Jesu!	私たちを憐れんで下さい、おおイエスよ！

＜受難の予言とイエスに対する謀議＞

Nr.2　(Matthäus 26:1-2)

福音史家：	Da Jesus diese Rede vollendet hatte,	イエスはこれらの言葉を語り終えると、
	sprach er zu seinen Jüngern:	弟子たちに言った。
イエス：	Ihr wisset,	お前たちも知っている通り、
	dass nach zweien Tagen Ostern wird,	二日後は過越となる。
	und des Menschen Sohn	そして、人の子は
	wird überantwortet werden,	ひき渡されるだろう、
	dass er gekreuziget werde.	十字架につけられるために。

Nr.3　コラール　　旋律Ａ：ヨハン・クリューガー、 詞：ヨハン・ヘールマン 「 Herzliebster Jesu 」 第 1 節

Herzliebster Jesu,	心より愛するイエスよ、
was hast du verbrochen,	何の罪を犯したのですか、
dass man ein solch scharf Urteil	そんな厳しい判決を
hat gesprochen?	言い渡されたとは？
Was ist die Schuld,	罪は何なのですか、
in was für Missetaten bist du geraten?	どのような悪事にあなたは陥ったのですか？

Nr.4a (26:3-5)

福音史家：	Da versammleten sich die Hohenpriester	そのころ、祭司長たちや
	und Schriftgelehrten und die Ältesten im Volk	律法学者および民の長老たちは、
	in den Palast des Hohenpriesters,	カイファという名の
	der da hieß Kaiphas,	大祭司の屋敷に集まり、
	und hielten Rat,	どのような計略で、
	wie sie Jesum mit Listen griffen und töteten.	イエスを捕らえ殺そうか、と協議した。
	Sie sprachen aber:	そこで彼らは言った。

Nr.4b (26:5) 二重合唱 （祭司長たち、および律法学者・長老たち）

Ja nicht auf das Fest,	そうだ、祭の間はいけない、
auf dass nicht ein Aufruhr werde im Volk.	民衆の中で騒ぎが起きないようにしよう。

＜香油を注ぐベタニアの女＞

Nr.4c (26:6-8)

福音史家：	Da nun Jesus war zu Bethanien,	さて、イエスが、ベタニアで、
	im Hause Simonis des Aussätzigen,	癩病人シモンの家にいた時、
	trat zu ihm ein Weib,	一人の女が、高価な香油の入った
	die hatte ein Glas mit köstlichem Wasser	ガラス容器を持って、彼に近寄り、
	und goss es auf sein Haupt,	イエスの頭に香油を注いだ。
	da er zu Tische saß.	それは彼が食卓に着いていた時だった。
	Da das seine Jünger sahen,	すると、イエスの弟子たちはそれを見て、
	wurden sie unwillig und sprachen:	腹を立てて言った。

Nr.4d (26:8-9) 合唱Ⅰ （弟子たち）

Wozu dienet dieser Unrat?	何のために、こんな無駄使いをするのか？
Dieses Wasser hätte mögen	この香油は
teuer verkauft	高く売られて、
und den Armen gegeben werden.	貧しい人々に施しとして与えられただろうに。

Nr.4e (26:10-13)

福音史家：	Da das Jesus merkete, sprach er zu ihnen:	すると、イエスはそれに気づいて、弟子たちに言った。
イエス：	Was bekümmert ihr das Weib?	なぜ、お前たちはこの女を困らせるのか？
	Sie hat ein gut Werk an mir getan.	彼女は私に良い事をしてくれたのだ。
	Ihr habet allezeit Armen bei euch,	貧しい人々は常にお前たちの周りにいるが、
	mich aber habt ihr nicht allezeit.	私は常にお前たちと一緒にいるわけではない。
	Dass sie dies Wasser	彼女が香油を
	hat auf meinen Leib gegossen,	私の体に注いだのは、
	hat sie getan, dass man mich begraben wird.	私が葬られるためにしてくれた事なのだ。
	Wahrlich, ich sage euch:	まことに、お前たちに言っておく、
	Wo dies Evangelium geprediget wird	この福音が宣べ伝えられるであろう所では
	in der ganzen Welt,	世界中どこでも、
	da wird man auch sagen zu ihrem Gedächtnis,	彼女のしてくれたこともまた、
	was sie getan hat.	彼女の記念として語り伝えられるだろう。

Nr.5 レチタティーヴォ（アルト）

Du lieber Heiland, du,	愛する救い主であるあなた、
wenn deine Jünger töricht streiten,	あなたの弟子たちは愚かにも言い争いました、
dass dieses fromme Weib	この敬虔な女が
mit Salben deinen Leib	あなたの身体に香油を塗ることによって
zum Grabe will bereiten,	墓へ葬る準備をしたことについて。
so lasse mir inzwischen zu,	それでも、私にお許し下さい、
von meiner Augen Tränenflüssen	私の目から流れる涙の
ein Wasser auf dein Haupt zu gießen!	一滴をあなたの御頭に注ぐことを。

Nr.6 アリア （アルト）

Buß' und Reu'
knirscht das Sündenherz entzwei,
dass die Tropfen meiner Zähren
angenehme Spezerei,
treuer Jesu, dir gebären.

懺悔と後悔は
この罪深い心を軋(きし)ませ二つに引き裂きます。
そして私の涙の滴は
心地よい香料となって、
誠実なイエスよ、あなたに注がれるのです。

＜ユダの裏切り＞

Nr.7 (26:14-16)

福音史家： Da ging hin der Zwölfen einer
mit Namen Judas Ischarioth
zu den Hohenpriestern und sprach:

その時、十二人の一人で
イスカリオテのユダという名の者が、
祭司長たちの所へ行き、言った。

ユダ： Was wollt ihr mir geben?
Ich will ihn euch verraten.

あなた方は私に幾らくれるでしょうか？
私が彼を裏切ってあなた方に売り渡しましょう。

福音史家： Und sie boten ihm dreißig Silberlinge.
Und von dem an suchte er Gelegenheit,
dass er ihn verriete.

そこで彼らは銀貨三十枚をユダに提供した。
この時からユダは、
イエスを裏切る機会を探し求めていた。

Nr.8 アリア（ソプラノ）

Blute nur, du liebes Herz!
Ach! ein Kind, das du erzogen,
das an deiner Brust gesogen,
droht den Pfleger zu ermorden,
denn es ist zur Schlange worden.

血を流すがよい、汝、愛する心よ！
ああ！あなたが育てた、
あなたの乳を吸った子が、
その養育者を殺そうと脅す。
なぜなら、その子は蛇になってしまったから。

＜最後の晩餐＞

Nr.9a (26:17)

福音史家： Aber am ersten Tage der süßen Brot
traten die Jünger zu Jesu
und sprachen zu ihm:

種なしパンの祭（除酵祭）第一日※に、
弟子たちがイエスのもとに来て、
彼に言った。 ※この日の日没後が過越の食事

Nr.9b (26:17) 合唱Ⅰ （弟子たち）

**Wo willst du, dass wir dir bereiten,
das Osterlamm zu essen?**

どこに、用意をいたしましょうか
過越の食事をする所を？

Nr.9c (26:18-21)

福音史家： Er sprach:

イエスは言った。

イエス： Gehet hin in die Stadt zu einem
und sprecht zu ihm:
Der Meister lässt dir sagen:
Meine Zeit ist hier,
ich will bei dir
die Ostern halten mit meinen Jüngern.

街のある人のところに行って、
彼にこう言いなさい。
「先生があなたにこう言っています。
『私の時が近づいた。
私はあなたの所で
弟子たちと一緒に過越をしたい』と。」

福音史家： Und die Jünger täten,
wie ihnen Jesus befohlen hatte,
und bereiteten das Osterlamm.
Und am Abend
satzte er sich zu Tische mit den Zwölfen.
Und da sie aßen, sprach er:

弟子たちは、
イエスが命じたとおりにして、
過越の食事を準備した。
晩になると、
イエスは十二人と一緒に食卓に着かれた。
一同が食事をしているとき、イエスは言われた。

イエス： Wahrlich, ich sage euch:

まことに、お前たちに言っておく。

Einer unter euch wird mich verraten. お前たちのうちの一人が私を裏切るだろう。

Nr.9d (26:22)

福音史家： Und sie wurden sehr betrübt und huben an, ein jeglicher unter ihnen, und sagten zu ihm: 弟子たちは非常に悲しんで、各々それぞれ、イエスに対して言い始めた。

Nr.9e (26:22) 合唱Ⅰ （弟子たち）

Herr, bin ich's? 主よ、それは私ですか？

Nr.10 コラール 旋律B：ハインリヒ・イザーク、 詞：パウル・ゲルハルト 「O Welt, sieh hier dein Leben」 第5節

Ich bin's, ich sollte büßen,	それは私です、私が償うべきなのです。
an Händen und an Füßen	両手、両足を
gebunden in der Höll.	地獄の中で縛られるべきなのです。
Die Geißeln und die Banden	鞭打ちと縄、
und was du ausgestanden,	そしてあなたが耐え忍ばれた苦難、
das hat verdienet meine Seel'.	私の魂は、それを当然受けるべきだったのです。

Nr.11 (26:23-29)

福音史家： Er antwortete und sprach: イエスは答えて言った。

イエス： Der mit der Hand mit mir in die Schüssel tauchet, der wird mich verraten. Des Menschen Sohn gehet zwar dahin, wie von ihm geschrieben stehet; doch wehe dem Menschen, durch welchen des Menschen Sohn verraten wird! Es wäre ihm besser, dass derselbige Mensch noch nie geboren wäre.

私とともに鉢に手を浸している者、その者が私を裏切るだろう。確かに、人の子は去って行く、聖書に書かれてあるとおりに。だが、その者に禍あれ！人の子を裏切るであろうその者に！彼にとって、より良かったのは、彼自身が生まれてこないことだったのに！

福音史家： Da antwortete Judas, der ihn verriet, und sprach: すると、イエスを裏切ったユダが答えて言った。

ユダ： Bin ich's, Rabbi? 先生、それは私ですか？

福音史家： Er sprach zu ihm: イエスは彼に言った。

イエス： Du sagest's. お前がそう言うのか。

福音史家： Da sie aber aßen, nahm Jesus das Brot, dankete und brach's, und gab's den Jüngern und sprach: 一同が食事をしている時、イエスはパンを取り、感謝して、それを裂き、弟子たちに与えて言った。

イエス： Nehmet, esset, das ist mein Leib. 取って食べなさい。これは私の体である。

福音史家： Und er nahm den Kelch und dankete, gab ihnen den und sprach: また、杯を取り、感謝して、彼らに与えて言った。

イエス： Trinket alle daraus; das ist mein Blut des neuen Testaments, welches vergossen wird für viele zur Vergebung der Sünden. Ich sage euch: Ich werde von nun an nicht mehr

皆、この杯から飲みなさい。これは、新しい契約のための私の血、多くの人にとって罪の許しのために流される血である。お前たちに言っておく。私は今より後、葡萄から作られた

von diesem Gewächs des Weinstocks trinken	このような酒を飲むことは決してないだろう。
bis an den Tag, da ich's neu trinken werde	私の父の国で、お前たちとともに、
mit euch in meines Vaters Reich.	新たに飲むであろう、その日まで。

Nr.12 レチタティーヴォ （ソプラノ）

Wiewohl mein Herz in Tränen schwimmt,	私の心は涙の中を漂よっています。
dass Jesus von mir Abschied nimmt,	イエスが私に別れを告げているからです。
so macht mich doch sein Testament erfreut:	それにもかかわらず、彼の契約は私を喜ばせます。
Sein Fleisch und Blut, o Kostbarkeit,	彼の肉と血、おお、この尊いものを
vermacht er mir in meine Hände.	彼は私の手に遺してくれたのです。
Wie er es auf der Welt mit denen Seinen	彼は、この世で彼とともに在った者を
nicht böse können meinen,	悪く思うことなどできなかったように、
so liebt er sie bis an das Ende.	世の終わりまで、彼らを愛してくださるのです。

Nr.13 アリア （ソプラノ）

Ich will dir mein Herze schenken,	私はあなたに私の心を捧げます。
senke dich, mein Heil, hinein!	降りてきて下さい、私の救いよ、私の中に！
Ich will mich in dir versenken;	私はあなたの中に身を沈めます。
ist dir gleich die Welt zu klein,	あなたにとってこの世が小さすぎようとも、
ei, so sollst du mir allein	そう、私にはあなただけが
mehr als Welt und Himmel sein.	世界や天よりもまさるべきものなのです。

＜オリーブ山での離反の予告＞

Nr.14 (26:30-32)

福音史家：	Und da sie den Lobgesang gesprochen hatten,	そして、彼らは賛美の歌を歌ってから、
	gingen sie hinaus an den Ölberg.	オリーブ山へと出かけて行った。
	Da sprach Jesus zu ihnen:	その時、イエスは弟子たちに言った。
イエス：	In dieser Nacht	今夜、
	werdet ihr euch alle ärgern an mir.	お前たちは皆、私に躓くだろう。
	Denn es stehet geschrieben:	聖書にこう書いてあるからだ。
	Ich werde den Hirten schlagen,	「私は羊飼いを打つ。
	und die Schafe der Herde	すると、群れの羊たちは
	werden sich zerstreuen.	散り散りになるだろう」と。
	Wenn ich aber auferstehe,	しかし、私は復活した時には、
	will ich vor euch hingehen in Galiläam.	お前たちより先にガリラヤへ行くつもりだ。

Nr.15 コラール

旋律C：ハンス・レオ・ハスラー、 詞：パウル・ゲルハルト 「 O Haupt voll Blut und Wunden 」 第 5 節

Erkenne mich, mein Hüter,	私を認めてください、私の牧者よ。
mein Hirte, nimm mich an!	私の羊飼いよ、私を受け入れてください！
Von dir, Quell aller Güter,	すべての宝の泉であるあなたから
ist mir viel Gut's getan.	私に多くの良いことが行われました。
Dein Mund hat mich gelabet	あなたの口は私を元気づけてくれました、
mit Milch und süßer Kost,	乳と甘い食べ物によって。
dein Geist hat mich begabet	あなたの霊は私に与えました、
mit mancher Himmelslust.	多くの天国の喜びを。

Nr.16 (26:33-35)

福音史家：	Petrus aber antwortete und sprach zu ihm:	するとペテロが答えてイエスに言った
ペテロ：	Wenn sie auch alle sich an dir ärgerten,	たとえ、皆があなたに躓いても、
	so will ich doch mich nimmermehr ärgern.	私はあなたに決して躓きません。
福音史家：	Jesus sprach zu ihm:	イエスは彼に言った。

イエス：	Wahrlich, ich sage dir: In dieser Nacht, ehe der Hahn krähet, wirst du mich dreimal verleugnen.	まことにお前に言っておく。 今夜、鶏が鳴く前に、 お前は三度、私のことを否認するだろう。
福音史家：	Petrus sprach zu ihm:	ペテロはイエスに言った。
ペテロ：	Und wenn ich mit dir sterben müsste, so will ich dich nicht verleugnen.	たとえ、あなたと共に死なねばならなくなっても、 私はあなたを決して否認しません。
福音史家：	Desgleichen sagten auch alle Jünger.	弟子たちも皆、同じように言った。

Nr.17 コラール　旋律C：ハンス・レオ・ハスラー、 詞：パウル・ゲルハルト 「O Haupt voll Blut und Wunden」 第6節

Ich will hier bei dir stehen; verachte mich doch nicht! Von dir will ich nicht gehen, wenn dir dein Herze bricht. Wenn dein Herz wird erblassen im letzten Todesstoß, als denn will ich dich fassen in meinen Arm und Schoß.	私はここに、あなたの側に在ります。 どうか私を侮らないで下さい！ あなたのもとから私は離れません、 あなたの心が張り裂ける時も。 あなたの心が、 最後の死の衝撃で、蒼ざめるであろう時、 私はあなたをしっかりと抱きましょう、 私の腕と膝に。

＜ゲッセマネの祈り＞

Nr.18 (26:36-38)

福音史家：	Da kam Jesus mit ihnen zu einem Hofe, der hieß Gethsemane, und sprach zu seinen Jüngern:	イエスは弟子たちと一緒に ゲッセマネという園に来て、 弟子たちに言った。
イエス：	Setzet euch hie, bis dass ich dort hingehe und bete.	ここに座っていなさい、 私が向こうへ行って祈っている間。
福音史家：	Und nahm zu sich Petrum und die zween Söhne Zebedäi und fing an zu trauern und zu zagen. Da sprach Jesus zu ihnen:	そして、ペテロおよび 二人のゼベダイの子らを連れて行ったが、 そこで、悲しみ怖れ始めた。 そして、イエスは彼らに言った。
イエス：	Meine Seele ist betrübt bis an den Tod, bleibet hie und wachet mit mir!	私の魂は死にそうなくらいに悲しい。 ここに留まり、私とともに目を覚ましていなさい。

Nr.19 レチタティーヴォ(テノール)とコラール(合唱Ⅱ)

O Schmerz ! Hier zittert das gequälte Herz; wie sinkt es hin, wie bleicht sein Angesicht !	ああ、苦痛よ！ 苦しめられた心がここに震えている。 その心は何と崩折れ、御顔は何と蒼ざめていることか！

＜Choral＞　旋律A：ヨハン・クリューガー、詞：ヨハン・ヘールマン 「Herzliebster Jesu」 第3節

Was ist die Ursach' aller solcher Plagen?	その全ての苦しみの原因は何ですか？

Der Richter führt ihn vor Gericht. Da ist kein Trost, kein Helfer nicht.	裁き主は彼を法廷に引き立て、 そこには慰めも、助ける人もいない。

Ach, meine Sünden haben dich geschlagen;	ああ、私の罪があなたを打ったのです。

Er leidet alle Höllenqualen, er soll vor fremden Raub bezahlen.	彼はあらゆる地獄の責苦に苦しみ、 他人の盗みの償いをしなくてはならない。

Ich, ach Herr Jesu, habe dies verschuldet, was du erduldet.	主イエスよ、ああ、私がこの罪を犯したのです、 あなたが耐えておられるその罪を。

Ach, könnte meine Liebe dir, mein Heil, dein Zittern und dein Zagen vermindern oder helfen tragen, wie gerne blieb ich hier !	ああ、私の愛が、できるなら、 私の救いよ、あなたの震えと怖れを、 和らげるか、支え助けることができるなら、 私はどんなに喜んでここに留まることでしょう！

Nr.20 アリア（テノール）＆ 合唱Ⅱ

Ich will bei meinem Jesu wachen.	私はイエスの側で目覚めていよう。
合唱： **So schlafen unsre Sünden ein.**	そうすれば私たちの罪は眠りこむ。
Meinen Tod büßet seine Seelennot, sein Trauren machet mich voll Freuden.	私の死を彼の魂の苦しみが償い、 彼の悲しみが、私を喜びで満たす。
合唱： **Drum muss uns sein verdienstlich Leiden recht bitter und doch süße sein.**	故に、彼の功徳ある受難は我々にとって 実に苦いが、また甘くもあるに違いない。

Nr.21 (26:39)

福音史家： Und ging hin ein wenig, fiel nieder auf sein Angesicht und betete und sprach:	そしてイエスは、少し奥へ入って行き、 跪いて顔をひれ伏して、 祈って言った。
イエス： Mein Vater, ist's möglich, so gehe dieser Kelch von mir; doch nicht wie ich will, sondern wie du willt.	我が父よ、できることなら、 この杯を私から取り去ってください。 しかし、私のではなく、あなたの望む通りに。

Nr.22 レチタティーヴォ（バス）

Der Heiland fällt vor seinem Vater nieder; dadurch erhebt er mich und alle von unserm Falle hinauf zu Gottes Gnade wieder. Er ist bereit, den Kelch, des Todes Bitterkeit zu trinken, in welchen Sünden dieser Welt gegossen sind und hässlich stinken, weil es dem lieben Gott gefällt.	救い主は父の御前にひざまずいた。 それによって彼は、私と全ての人を、 我々の堕落から 神の恵みへと、再び、すくい上げてくださる。 彼は杯を、死の苦みを飲む 準備をされている。 その杯には、この世の罪が 注がれ、厭うべき悪臭を放っているが、 これを飲むことが、愛する神の意に適うことだから。

Nr.23 アリア（バス）

Gerne will ich mich bequemen, Kreuz und Becher anzunehmen, trink' ich doch dem Heiland nach. Denn sein Mund, der mit Milch und Honig fließet, hat den Grund und des Leidens herbe Schmach durch den ersten Trunk versüßet.	喜んで私は承知しよう、 十字架と杯を受けることを。 もちろん私は救い主にならって、それを飲もう。 なぜなら、彼の口は、 そこから乳と蜂蜜が流れ出て、 それが、大地と 受難の苦い恥辱とを 最初のひと飲みで、甘くしてくれたのだから。

Nr.24 (26:40-42)

福音史家： Und er kam zu seinen Jügern und fand sie schlafend und sprach zu ihnen:	そしてイエスは弟子たちのところへ戻り、 彼らが眠っているのを見て、彼らに言った。
イエス： Könnet ihr denn nicht eine Stunde mit mir wachen? Wachet und betet,	さて、お前たちは、ひと時も 私とともに目を覚ましていられないのか？ 目を覚まして祈っていなさい！

	dass ihr nicht in Anfechtung fallet! Der Geist ist willig, aber das Fleisch ist schwach.	誘惑に陥らぬように。 精神はしっかりしていても、 肉体は弱いものだ。
福音史家：	Zum andernmal ging er hin, betete und sprach:	さらにもう一度、奥へ入って行き、 祈って言った。
イエス：	Mein Vater, ist's nicht möglich, dass dieser Kelch von mir gehe, ich trinke ihn denn, so geschehe dein Wille.	我が父よ、 この杯を私から取り去ることがかなわないのであれば、 私はそれを飲みます、 あなたの御心が行われますように。

Nr.25 コラール　旋律：クローダン・ド・セルミジ（仏）、　詞：プロイセン公アルブレヒト

Was mein Gott will, das g'scheh' allzeit, sein Will', der ist der beste, zu helfen den'n er ist bereit, die an ihn gläuben feste, Er hilft aus Not, der fromme Gott, und züchtiget mit Maßen. Wer Gott vertraut, fest auf ihn baut, den will er nicht verlassen.	私の神が意図することが、常に行われますように。 神の意志、それは最良のものなのです。 神は、助けようと備えているのです、 神を堅く信じる者たちを。 彼は苦しみから助けてくれる、誠実な神、 そして節度をもって懲らしめもする。 神を信頼し、しっかりと神を礎とする人、 その人を、神は見捨てないでしょう。

＜イエス捕縛＞

Nr.26 (26:43-50)

福音史家：	Und er kam und fand sie aber schlafend, und ihre Augen waren voll Schlaf's. Und er ließ sie und ging abermal hin und betete zum drittenmal und redete dieselbigen Worte. Da kam er zu seinen Jügern und sprach zu ihnen:	イエスが戻ると、弟子たちが眠っているのを見た。 彼らの眼は眠気でいっぱいだったのだ。 そこでイエスは彼らから離れ、また奥へ入って行き、 三度目も祈り、 同じ言葉を語った。 それからイエスは、弟子たちのところに戻って来て、 彼らに言った。
イエス：	Ach! wollt ihr nun schlafen und ruhen? Siehe, die Stunde ist hie, dass des Menschen Sohn in der Sünder Hände überantwortet wird. Stehet auf, lasset uns gehen! Siehe, er ist da, der mich verrät!	ああ、お前たちはまだ眠り休むつもりなのか？ 見よ、時が来た。 人の子が 罪人の手に引き渡される時だ。 立て、行こう。 見よ、私を裏切る者がそこにいる。
福音史家：	Und als er noch redete, siehe, da kam Judas, der Zwölfen einer, und mit ihm eine große Schar mit Schwertern und mit Stangen von den Hohenpriestern und Ältesten des Volks. Und der Verräter hatte ihnen ein Zeichen gegeben und gesagt: „Welchen ich küssen werde, der ist's, den greifet!“ Und alsbald trat er zu Jesu und sprach:	イエスがまだ話しているうちに、見よ、 十二人の一人であるユダがやって来た。 そして彼とともに大勢の群衆が 剣や棒を持ってやって来た。 祭司長たちや民の長老たちが 遣わしたのである。 この裏切り者(ユダ)は、前もって、 彼ら(群衆)に合図を与えて、こう言っていた。 「わたしが口づけするのが、その人だ。 それを捕まえろ」と。 ユダはすぐにイエスに近寄り、言った。
ユダ：	Gegrüßet seist du, Rabbi!	挨拶を受けて下さい、先生！
福音史家：	Und küssete ihn. Jesus aber sprach zu ihm:	そして彼に口づけした。イエスは彼に言った。

イエス： Mein Freund, warum bist du kommen? 我が友よ、なぜあなたは来たのか？

福音史家： Da traten sie hinzu
und legten die Hände an Jesum
und griffen ihn.
すると人々は進み寄り、
イエスに手をかけて
彼を捕らえた。

Nr.27a 二重唱（ソプラノ・アルト）＆ 合唱Ⅱ

So ist mein Jesus nun gefangen. こうしてイエスは今や捕らえられてしまった。

合唱： **Lasst ihn, haltet, bindet nicht !** 彼を放せ、やめろ、縛るな ！

Mond und Licht
ist vor Schmerzen untergangen,
weil mein Jesus ist gefangen.
Sie führen ihn, er ist gebunden.
月も光も
心痛のため沈んでしまった。
私のイエスが捕らえられてしまったから。
彼らはイエスを連行し、彼は縛られてしまった。

Nr.27b 二重合唱

Sind Blitze, sind Donner
in Wolken verschwunden?
Eröffne den feurigen Abgrund, o Hölle,
zertrümmre, verderbe,
verschlinge, zerschelle
mit plötzlicher Wut
den falschen Verräter,
das mördrische Blut!
稲妻と雷鳴は
雲のなかに消えてしまったのか？
火の深淵を開け、おお地獄よ！
粉々に打ち砕け、 破壊せよ、
飲み込んでしまえ、 粉々にしてしまえ、
突然の激しい怒りでもって、
偽りの裏切り者を！
殺人者の血統を！

Nr.28 (26:51-56)

福音史家： Und siehe,
einer aus denen, die mit Jesu waren,
reckete die Hand aus
und schlug des Hohenpriesters Knecht
und hieb ihm ein Ohr ab.
Da sprach Jesus zu ihm:
すると見よ、
イエスと一緒にいた者の一人が、
手を伸ばして(剣を抜き)、
大祭司の手下に打ちかかって、
彼の片方の耳を切り落とした。
そこで、イエスはその(切りかかった)者に言った。

イエス： Stecke dein Schwert an seinen Ort;
denn wer das Schwert nimmt,
der soll durchs Schwert umkommen.
Oder meinest du,
dass ich nicht könnte meinen Vater bitten,
dass er mir zuschickte
mehr denn zwölf Legion Engel?
Wie würde aber die Schrift erfüllet?
Es muss also gehen.
剣を鞘に収めなさい。
なぜなら、剣を取る者は、
剣によって滅びることになっているからである。
それともお前は、
私が父にお願いできないと思っているのか？
(私がお願いすれば)、父は
十二軍団以上の天使たちを送ってくださるであろう。
しかしそれでは、聖書はどうして実現されようか？
こうならなければならないのだ。

福音史家： Zu der Stund' sprach Jesus zu den Scharen: またその時、イエスは群衆に対して言った。

イエス： Ihr seid ausgegangen als zu einem Mörder,
mit Schwerten und mit Stangen,
mich zu fahen;
bin ich doch täglich bei euch gesessen
und habe gelehret im Tempel,
und ihr habt mich nicht gegriffen.
Aber das ist alles geschehen,
dass erfüllet würden
die Schriften der Propheten.
あなたたちは、まるで殺人者に対するように、
剣や棒を持って、
私を捕らえにやって来た。
私は毎日、あなたたちの側に座って、
神殿の中で教えていたのに、
あなたたちは私を捕らえなかったではないか。
しかし、この全てのことが起こったのは、
預言者たちの書いたことが
実現するためなのだ。

福音史家： Da verließen ihn alle Jünger und flohen. すると弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げ去った。

Nr.29　第Ⅰ部終曲コラール

旋律：マティアス・グライター、　詞：ゼーバルト・ハイデン　「 O Mensch, bewein dein Sünde groß 」　第 1 節

O Mensch, bewein dein' Sünde groß, darum Christus sein's Vaters Schoß äußert und kam auf Erden;	おお人よ、汝の罪の大いなることを嘆け。 そのためにキリストは父の懐から 現れ、地上に降りて来られた。
von einer Jungfrau rein und zart für uns er hie geboren ward, er wollt' der Mittler werden.	純粋な優しい乙女から、 私たちのためにこの世に生まれて、 仲介者になろうとされた。
Den Toten er das Leben gab und legt' dabei all' Krankheit ab, bis sich die Zeit herdrange,	彼は死者たちに生命を与え、 彼らからすべての病を取り去って下さった。 時が迫るまで。
dass er für uns geopfert würd', trüg' unsrer Sünden schwere Bürd' wohl an dem Kreuze lange.	(時が来て)　彼は、私たちのために犠牲となり、 私たちの罪の重荷を背負って下さった。 十字架上において長い間、十分に。

訳：山岸 健一（仙台宗教音楽合唱団）

指揮・解説　佐々木正利

盛岡市出身。盛岡一高卒。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院修士課程及び博士後期課程修了。1979年シュトゥットガルトに渡り、82年までデットモルト北西ドイツ音楽大学に学ぶ。得意の宗教音楽の分野では日本を代表する「バッハ演奏家」として、79年、85年のザルツブルク音楽祭をはじめ、内外で福音史家、テノール・ソロを務めて絶賛されている。合唱指揮者としても、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、岩手大学合唱団、仙台宗教音楽合唱団、東北大学混声合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会、オーケストラ・アンサンブル金沢合唱団、東京21合唱団、山響アマデウスコア、熊友会ヴォーカル・アンサンブルなどで指揮者を務め、高く評価されている。第6回ライプツィヒ国際バッハコンクール第5位。二期会バッハ・バロック研究会講師。現在、岩手大学教育学部名誉教授。

オルガン　劔持清之

国立音楽大学卒業。チェンバロを西川清子、水野均、岡田龍之介の各氏に師事。

各地の演奏会に出演しバロック奏者との共演や、佐々木正利、小原浄二、岩城宏之、H.J.ロッチュ、H.ヴィンシャーマン各氏指揮のバッハ「カンタータ」「ロ短調ミサ曲」「ヨハネ受難曲」「マニフィカート」等の通奏低音で、アンサンブル経験を深める一方チェンバロリサイタル、デュオコンサート等で活動。フランス、ドイツ公演など海外でも演奏を行なう。

盛岡大学短期大学部教授。岩手県立大学非常勤講師。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

1977年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してJ.S.バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。指揮者、佐々木正利の ドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導により「<言葉が生きる>と<音楽が生きる>とは歌の世界では同義語である」という音楽信条が演奏上の身上となっている。ヴィンシャーマン、ロッチュ、マズア、リリング、岩城宏之等世界的指揮者との共演を重ね、ドイツ・バロック音楽を音楽的かつ人間的に表現できる合唱団として熱い評価を得るようになった。2017年に盛岡市民文化ホールで行った「ヨハネ受難曲演奏会」で40周年を迎えた。

「マタイへの旅」第二回　補遺資料

佐々木正利

イエスの祈り

いよいよ捕縛される時が近づいてきました。その前の父なる神との最後の対話、イエスの祈りについてお話しします。そもそも一体、イエスはどこで祈ったのか？ また最も不思議な、そして興味を唆られるものとしてイエスの祈り方があります。かつて弟子たちがイエスに祈りの方法を聞いたことがあります。その回答としてイエスは、弟子たちに“主の祈り”を教えてくれました。以下にその聖句を掲げます。

（マタイによる福音書６章５～１５節）
5節「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言っておく。彼らは既に報いを受けている。6だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。7また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思い込んでいる。8彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。9だから、こう祈りなさい。
『天におられる私たちの父よ、御名が崇められますように。10御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも。11私たちに必要な糧を今日与えてください。12私たちの負い目を赦してください。私たちも、自分に負い目のある人を赦しましたように。13私たちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。』
14もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。15しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。」

主の祈りとは、イエスが示した祈りの見本です。即ち、祈りの中に含まれるべき内容を私たちに教えてくれているのです。この祈りを分解して意味を考えてみましょうか。「天におられる私たちの父よ」というのは、祈りを誰に向けてするべきかを教えています。つまり、天の父に祈りを向けるということ。「御名が崇められますように」というのは、私たちに神だけを礼拝し、神がどういうお方かを知って賛美することを教えてくれています。「御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも」という言葉は、私たちに自分の生活にも世界においても、自分のではなく神のご計画が為されるように祈るべきだと言うことを思い出させてくれます。私たちは自分の願望ではなく、神のみこころが為されるようにと祈るべきだと言っているのです。「私たちに必要な糧を今日与えてください」という祈りは、私たちの必要を神が叶えてくださるようにと祈ることを勧めています。「私たちの負い目を赦してください。私たちも、自分に負い目のある人を赦しましたように」　は、神に自分の罪を告白し、神が私たちを赦してくださったので、私たちも人を赦すべきだということを覚えさせます。「私たちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください」という主の祈りの結論は、罪に打ち勝つために神に助けを願い、サタン（悪魔）の攻撃からの守りを願うものです。

このように主の祈りとは、神を称え、あなたの人生にイエスの完全が臨まれ、あなたの必要の満たしを願い、供給されると信じ、あなた自身を神にささげることができるように祈ることなのです。

福音書にはイエスの祈りのほんの断片だけが記されています。イエスは時々、夜通し祈ることがありました。その祈りは半端なものではなく、ゲツセマネの園でのイエスと父との会話の壮絶さは、血の汗を流したと聖書に記されていることでも分かります。イエスの最後の祈りは“わたしの思いではなく、しかし、あなたの御心がなりますように”と二つの思いが共存しています。この言葉にはこれから起きる虐待も受け入れる完全な献身への覚悟が含まれていて、死との対面を避けてしまいがちな人間とはなんと対照的でしょう。

さて 聖書には、イエスが公共で祈ったことについては記録されていません。イエスは、その当時の祭司たちがしていたような、自分自身に注意を引くために霊性を用いることをしないよう、従う者たちに言われました。イエスは気が散らないよう、あえて誰もいない静かな場所に退いて一人で祈りを捧げたのです。祈りは一方通行ではありません。父なる神は、祈る者とのコミュニケーションを熱望しています。創造主との素晴らしいコミュニケーションの機会を、祈る者たちは提供されているのです。神は、祈る者たちの必要では

なく、信仰に答えてくださるとイエスは示しています。主の御心を知ることが祈りの核心であることをイエスは説いているのです。

キリスト者の祈り

このようにイエスご自身は自分のために祈るということは一切せず、人々の救いが成就するためのとりなしの祈りを捧げられました。それではキリスト者の祈りはどうあるべきかと聖書は説いているでしょうか。

祈るという概念は、一般的にいうと神様に何かをお願いすることと思われがちですが、キリスト教の祈りには、主に四つの祈りがあります。一つ目は、言わずもがな、神様に祈るといえば教えられなくても知っている「願い」を申し上げるという祈りです。自分のこと、隣人のことについての願いを祈る、その祈りです。二つ目は「悔い改め」の祈りです。神様に対して罪を認め、罪を告白するのです。三つ目は「賛美」と「感謝」の祈りです。そして四つ目は「神の御心を問う祈り」です。自分がどうすべきか、神の御心を尋ねて問うのです。聖書の中には、そのような四つの祈りの種類があることが記されています。

キリスト者の祈りとしてそう教えられているにも拘らず、中々実践できないのは「神の御心を問う祈り」であり、この種の祈りは他の宗教にはあまり見られません。神は全能ですから、「神様、私の願いを聞いてください。こうしてください。ああしてください」と祈ることは自然なことです。しかし同時に忘れてはならないのは、「神様、私はどうすればよいのでしょうか？教えて下さい。」という神の御心を尋ねる祈りです。それは、神様の御心に自分は従いますから、どうか私がどうしたらよいかを教えて下さい、と尋ねる祈り、即ち自分が神に従うことを前提にして祈る祈りです。イエスがゲツセマネの園で祈られたのは、神の御心に従うことを前提に、本当に十字架という神の差し出した杯を受けるべきなのかどうか、神の御心を尋ね答えを求めて祈られたのでした。

ゲツセマネという場所

「ゲツセマネの祈り」、神の御子のこの祈りの場面は厳粛であり、また神秘に満ちています。イエスが十字架にかけられる前の晩、使徒たちとの最後の晩餐の後、イエスとその一行はオリーブ山の麓にあるゲツセマネと呼ばれるオリーブの木が茂った園の方へ向かわれました。このとき、マタイ福音書（第26章30節）には「一同は賛美の歌を歌ってから、オリーブ山へ出かけた」と綴られています。キリスト教でいう賛美とは、神と向き合い神の大きな恵みや愛を受けて生きる者が、神に感謝や喜びを表し、苦難の中にあっても神への信頼を歌う、心の奥深くから湧き出る発露である「祈り」です。ここで歌った賛美歌とは、当時、過越の祭りなどで歌われていた詩篇113～118篇であったと言われています。特にその中の113篇5～9節に描かれている「身を低くされた神」を歌ったとすれば、それがどういうことか、イエスご自身がこれからの自らの姿を通して目の当たりさせることになるわけですから、とても意味深い賛美であったということが言えましょう。尤もイエスはこれらの詩篇の意味するところをよく知って歌われたのでしょうが、弟子たちはおそらく何もわからず歌っていたのではないかと思いますが。

旧約聖書時代の賛美歌にあたるものが「詩編」であることは有名です。詩編を開きますと、しばしば最初の節に、その詩編を賛美するためのいろいろな音楽的な説明文が記されています（例えば、60編の冒頭、1節 「指揮者によって。「ゆり」に合わせて。定め。ミクタム。ダビデの詩。教え。2節 ダビデがアラム・ナハライム及びツォバのアラムと戦い、ヨアブが帰ってきて塩の谷で一万二千人のエドム人を打ち取ったとき」というように）。

さて、エルサレム神殿の東のケデロンの谷を渡り、オリーブの油を搾る搾油所のあったゲツセマネという場所で、イエスは悲しみもだえて十字架刑を受けることの苦悩を祈りましたが、イエスが祈った場所と弟子たちがいる場所との距離は「石を投げて届くほどの距離」でした。またイエスがイスカリオテのユダに裏切られ捕えられた場所でもあります。祈りを捧げた場所から90メートル離れた洞窟がイエスが捕縛された場所であるとされています。

イエスはなぜに悲しみに悶えたのか

37節にイエスが、ペテロとゼベダイの二人の子、即ちヤコブとヨハネを伴われて祈りに臨まれた際、悲しみ悶え始められたと記されていますが、そのような死ぬほどの悲しみになぜイエスは捕われたのか、疑問に感じませんか。同時にキリスト者であれば、この記事には少なからぬ動揺に見舞われることでしょう。「私

は死ぬばかりに悲しい」と仰るイエス、果たして聖書の中にこれまで認識してきたイエス像とは相容れない大きな衝撃を指し示しています。

聖書が語るイエスは、人となられた神の御子です。たった５つのパンと２匹の魚で男だけでも５千人もの人々を養って満腹にされた方、人々の病を癒し、悪霊を追い出し、目の見えない人の目を開け、死人を甦らせた方、弟子たちと共に乗った船が嵐に見舞われ弟子たちが死の恐怖を感じた時も、やおら起き上がられて風と波を叱りつけて嵐を静められた方です。そのように、圧倒的に神の御力を持っておられる方、揺るぎなく頼もしいお方であったはずのイエスですから、この記事から受ける驚き、恐れは尋常のものではありません。

しかし、イエスが架けられる十字架が、何のためであったのかを改めて考える時、それは神の怒りの杯、即ち神の罰を人々に代わって受けるためということに思い至るのです。本当は、神に背いてきた人間が神の怒りの罰を受けて死ななければならなかった。そうした人間こそが十字架につけられて死ななければならなかったのです。ですから、このゲツセマネの祈りのイエスの悲しみは「罪人たる人間が、神の罰を受けて死ななければならない」ということへの悲しみであるといえましょう。それほど人間の罪は大きく、救いがたいということなのです。それゆえ、イエスのその悲しみとは、自分のことで悲しんでおられるのではなく、罪人たる人間が死ななければならない、そのことへの悲しみであることが分かります。イエスは罪人たる人間の代わりに死出へ旅立たれるのです。

この箇所は、マタイ伝よりルカ伝(22章44節)がそのイエスの苦悩を詳しく次のように描写しています。「イエスは、苦しみ悶えていよいよ切に祈られた。汗が血の雫のように、つまり滴るように地に落ちた」。この祈りのために、天から御使いが現われてイエスを力づけたとルカは記しています。イエスの苦悩を我々は推し量ることはできませんが、聖書はこの苦悩を「この杯」と表現しています。まさに、この時のイエスの心の中は苦悩に押しつぶされるような状態、即ち人の知り得ない闘いが内に起こっていたことが分かります。

杯を過ぎ去らせて欲しいと願うその心（そもそも杯とは？）

神の子イエスがゲツセマネの祈りの中で、父なる神に対して「できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせて下さい」と祈られていることも意外です。そもそも「杯」というのは、旧約聖書では「神の怒りの杯」、つまり神の裁きを表しますが、ここでは十字架を指しています。神の怒りの裁きとして、イエスは自分自身が十字架に架けられる、そのことを知っていました。それだけではなくこのことを弟子たちに向かって預言してきたのです。しかし今イエスは、「できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせて下さい」と父なる神に祈ります。即ち、十字架に架からなくても済むようにして下さい、と言っているのです。これには我々も、驚きます。「イエスは死ぬのが怖くなったのだろうか？」「恐れをなしたのだろうか？」などと考えてしまいませんか。つまり我々は、ここにおいて主に二つの点で疑問を持つのです。なぜ神の御子であるイエスがそれほど悲しまれたのか、ということが一つ、そして今一つは、なぜ十字架の回避を神に願われたのかということについてです。

ここで我々は、イエスが何のためにこのゲツセマネにて祈りを捧げられたのかを再度考えてみなければなりません。つまりこの祈りは何の祈りなのか、ということです。しかし、イエスが何を祈られたのかを見てみますと、聖書には極めて短い言葉しか記録されていません。それは次の二つの聖句です。最初の祈りが「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」(39節)。そしてもう一度弟子の所に戻ってから言われた言葉が「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように」(42節)です。更にまた弟子たちの所に戻って、そして三度行って祈られた時には、「三度目も同じ言葉で祈られた」（44節）と書かれています。これは何の祈りなのか？ そう、これは父なる神に答えを求める祈りです。十字架という神の裁きの杯を、本当に飲むべきなのかどうなのか、父なる神に答えを求めて祈っておられるのです。

ところで、イエスに襲いかかる死は尋常なものではありませんでした。その死は愛のための死であったにも拘らず、きわめて残酷で、惨めで、みすぼらしい形で来るものでした。自分を愛してくれる者のために死ぬこと、あるいは、英雄的な華々しい死に方をすることは容易かもしれません。しかし周囲の人々から誤解され、嘲られ、唾を吐きかけられ、罵られながら死んでいくことは、普通の人間であればとても耐えられないものです。イエスの苦悩はそうした死を受け入れるための孤独の戦いだったと言えましょう。

ここで過越の祭りについて一言。その過越の祭りこそ、イスラエル民族の発祥の祭りであり、エジプトで奴隷であった民が、神の導きによりモーセを指導者に選び出し、奴隷から自由の民として解放と独立を記念

するお祭りです。「安息日」と「過越の祭り」からなっていますが、これこそイスラエル人をイスラエル人たるものとし、そのアイデンティティーの土台となる二大祭りなのです。この祭りの間、四つの杯を飲むのですが、それぞれ、１杯目「聖別の杯」、２杯目「感謝（救い）の杯」、３杯目「祝福と贖いの杯」、４杯目「賛美の杯、あるいは完了の杯」と意味付けられています。

39節の「この杯」の意味は、このユダヤ教的視点から解釈すると異なります。というのは、「過越の祭り」で飲まれる四つの杯の最後の「杯」は、イエス一人が飲み干されるからです。つまり、その「完了の杯」はイエスにこそふさわしいのです。これは罪の贖いを成し遂げて人々を神のものとする新しい契約締結の「完了の杯」を意味します。そしてそれは、イエス自身にとって壮絶な苦しみを伴うことを余儀なくされるものでした。

イエスの飲んだ「この杯」が意味するものは何だったのでしょうか。改めて申しますと、そこには少なくとも二つの意味があります。一つは、今述べたような無残な死を味わうという「苦悩の杯」です。人間が経験するすべての苦しみをイエスが代替わりして味わうことを意味します。詩篇の中に見られるような悪者たち(神に従わない者たち)の心や行為、ことばのすべて、即ち相集っての企み、陰謀、悪意、横暴さ、脅し、怒り、蔑み、罵り、拒絶、欺き、高ぶり、偽善、よこしま、裏切り、暴力などが、イエスの受難の中に凝縮しているのです。これらすべてがイエスの受けるべき「杯」でした。普通、この中の一つでさえも耐えがたいものなのに、イエスはそのすべてを受けようとしたのです。イエスの受けた傷、こぶしで殴りつけられた打撲傷、鞭で打たれた裂傷、いばらの冠をかぶせられてできた刺し傷、十字架につけるための手と足、槍で脇腹を刺された貫通傷、そして破裂、誰がこのような傷に耐え得ることができるでしょうか。イエスはあらゆる苦しみを味わうことで、どんな人に対しても共感(同情)できる大祭司となることができたのです。そのためには、この「あらゆる苦しみを受けるという杯」を飲まなければなりませんでした。即ち、「イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因である方として、ふさわしいことであったのです。主は、ご自分が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることができるのです」とヘブルは記しています（第2章9〜10節、18節）。

さて「この杯」が意味するもう一つの意味は、イエスが人間の犯した罪の身代わりとして、裁きを受けるという「神の怒りの杯」です。神の罪に対する怒りを、裁きを人間に代わって受けるという杯です。それはまた、人間の誰もが知り得ぬ本当の死の恐怖、それは関わりの存在として造られた者が、一切の関わりを絶ち切られるという地獄の苦しみ、それを受けることを意味していました。一体誰がその恐怖に耐えることができるでしょうか。最後の晩餐の席でイエスは、新しい「主の晩餐」を守るように弟子たちに語られました。それはイエスの肉体と血による新しい契約をいつも覚えているように、ということです。それはイエスが全人類のために受けられる苦しみを決して忘れないようにという教えでした。そして、その肉体と血が一体どのように信仰を持つ人間に与えられるのか、イエスはそこに向かって進もうとされていたのです。「父よ、私の願いではなく、御心のままになさってください」との祈りによって、イエスは敢然と死に向かって行くために御父に身を委ねられたのでした。

「もしできるならば」と祈るイエスの祈りに対して、主の答えは無言でした。無言という祈りの答えでした。「しかし、私の願いではなく、御心のとおりにしてください」とイエスは祈り続けていましたので、それが答えであると受け留めました。そして、その祈りは突き抜けたのです。一見、イエスは、弱く、みすぼらしく、そして無力な姿に見えます。しかしその姿の中に既に敵を打ち砕く勝利が、ゲツセマネの祈りにおいて与えられたのです。すべては他でもない、イエスに信仰を置く「私」のための苦しみでした。主がこれから引き受けられるすべての痛みと苦しみ、そして恥は、「私」の身代わりとして引き受けてくださったものなのです。

弟子たちはなぜに眠くなったのか

ゲツセマネの園のあるオリーブ山は、エルサレム市街から見ると東南東、ケデロンの谷を挟んで、神殿の丘に対置する位置にあります。そこに向かう途上でイエスは、ヨハネの福音書15章、16章に記されている深淵な教えをされました（神様は庭師であり、イエス自身はぶどうの木で、人はイエスを通してのみ聖なる神様と繋がることができる）。既に13章の洗足の行為のあとで、4人の弟子たち(ペテロ、トマス、ピリポ、ユダ)がイエスに質問をしたことを契機として語られた教えが記されていますが、これら何れも極めて重要な教

えを、弟子たちは食べながら、そして歩きながら聞いたことになります。イエスの深遠な教えを聞いていた弟子たちは、その疲れのためか、ゲツセマネの園にある適当な木を見つけては、寄りかかるにふさわしい場所を見つけて寝ってしまったようです。しかしイエスはやがて自分に襲ってくる死の恐れと一人戦わなければなりませんでした。

さて前段に書いたように、イエスは血のように汗を滴らせて全身全霊で父なる神と対話、即ち祈りを捧げましたが、父なる神の答えは記されていません。その代わりに、「石を投げて届くほどの距離」で待機していた弟子たちの、眠りこけている姿が描かれています。祈られる前にイエスが「わたしと共に目を覚ましていなさい」と仰ったのに、1時間祈ってイエスが弟子たちの所に戻られると、弟子たちは眠っていたのでした。そしてあろうことか、再びイエスが行って祈られ、そして戻ってこられるとまた弟子たちは眠っていたのです。3度目も同じでした。そんな中、イエスはこう言います。「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い」（41節）。何度起こしてもまた眠っている弟子たちの姿。これが父なる神が示された答えではなかったかと私は思います。つまり、弟子たちの心が弱いのではないのです。精神が弱いのではないのです。心は燃えているのですが、肉体が弱いのです。そしてこれこそが罪の本質なのです。心は熱していても、肉体が弱いのです。私たちが肉体をもっているということ。それに引きずられるのです。例えばです。先の大震災の中で「買いだめをしてはいけない」ということは心では分かっている。しかし、取り敢えず我が身が心配であるということで、買いだめをしてしまう。我先に、となるわけです。これなども私たちが肉の体を持っているからだといえるのではないでしょうか。使徒ペテロが、このゲツセマネに来る直前に「たとえ、ご一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」（35節）と言った、その舌の根も乾かないうちに、主イエスを見捨てて裏切ってしまった。これもまた、心は熱しているが肉体が弱い、そこに表されている罪の所以です。　　わずか1時間でも、共に目を覚まして祈っていることのできない弟子たちの姿を見た時、そのような人間を救うためには、神の御子が十字架にかかって代わりに神の罰を受けて死ぬしかない、という神の答えの一つをイエスは戴いたのだと思います。

イエスとユダ（裏切りのユダをイエスはどう思っていたか）

ある本の中で、主人公が「ユダの裏切りをイエスは知っていたのに、なぜ行かせたのか疑問に思っていた」というくだりがありました。ユダの裏切りの話はとてもドラスティックでインパクトがありますが、イエスの真意についてはあまり叙述されていません。イエスはユダが自分を裏切ると知っていながら、なぜ彼を選んだのか、という疑問がどうしても残ります。これは、とても難しい質問だと知り合いの牧師が言っていました。どうしてかといいますと、ユダについて「全てを知ることは不可能」だからだそうです。確かに、聖書には全部のことが書かれているわけではないのでしょう。しかし、書かれている情報からでもある程度のことは分かってきます。

そこで、次の三つの視点で紐解いて見たいと思います。一つ目に「神の予知と人間の自由意思」という観点です。神は、ユダの裏切りを予知しておられました。なぜかというと神は全知全能のお方だからです。と同時に、ユダが自分で裏切りの道を選択したというのも事実です。つまり、神が予知しておられたからといって、ユダの「責任」が軽くなるわけではないのです。　というより、ユダの「責任」自体、神のご計画の下にあったと言ってよいでしょう。神は永遠の昔から、キリストがユダに裏切られて、私たちの罪のために十字架で死んで、甦えられることを定めておられました。イエスが「自分について書いてある通りに去っていきます。」と言われたのはこの意味であり、人間のために救いを備える神の計画は、誰も止めることはできなかったのです。即ち、すべてがあらかじめ定められていたという事実は、ユダの弁解にもなりませんし、この行動で彼の果たした役割によって受ける罰から免れることにもなりません。ユダは自分で選択したのです。それらの選択がユダの罪の定めの源なのです。それでも、彼の選択は神の主権ある計画に完全に一致しました。神は人の善を支配するだけでなく、人の悪をも、ご自分の計画の結果を達成するために支配しておられるのです。先ほど「神は永遠の昔から・・・定めておられました」と書いたのはそういうことでした。つまり時間とは、神によって造られた概念、被造の世界に付随した概念なのです。ですから、ユダは自分の責任で裏切りを選んだとも言えるし、同時に神はそれを予知しておられたとも言えるのです。

二つ目として「イエスの愛」と「ユダの選択」を対比させてみたいと思います。聖書を読むと、イエスは繰り返しユダに「悔い改めの機会」を提供しておられます。しかしユダは、最後までそれを拒み続けています。あの最後の晩餐の席で、イエスはユダにしか分からない方法で警告を発しています。イエスが語られた

「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい」ということばも、ユダにしか分からない警告のことばです。

もともとイエスは十二弟子をお選びになった後、弟子の中の一人が裏切ることを何度か預言していました。例えばヨハネ6章70節で、イエスは「あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか。ところがその中の一人は悪魔だ」と言い、また13章10節では「既に体を洗った者は、全身清いのだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない」と言っています。そして13章18節では、「『わたしのパンを食べている者が、わたしに逆らった』という聖書の言葉は実現しなければならない」とも言っています。こうしてユダの裏切りを予言しているのですが、そのユダに対してイエスはどのように愛を示しているのでしょうか。まずイエスは、最後の晩餐後、自分を裏切ろうとしているユダの足をも洗われました。　また、イエスは「この中にわたしを裏切る者がいる」と言いましたが、決してはっきり名指しすることはなかったので、弟子たちはイエスが誰のことを言ったのか分からずに、当惑して互いに顔を見合わせてしまっています。するとペテロが、イエスが愛しておられた弟子（おそらヨハネだと思われます）に、「誰のことを言っておられるのか、知らせなさい」と合図を送りましたね。そこでイエスの右側の席に着いていたこの弟子は、「先生、いったいそれは誰ですか」と尋ねたのでしたが、イエスは「それはわたしがパン切れを浸して与える者です」と言われパン切れを浸し、それを取りユダに与えられました。この記事を読むと、イエスはこの弟子にユダが裏切ることをはっきり示しているではないか、と思われるかもしれませんが、その続きを読むと、弟子たちは誰もイエスを裏切るのがユダであることは分かっていないのですね。もし仮に、イエス様がユダにパン切れをお与えになったことで裏切り者がユダだとはっきり分かったのなら、短気なペテロなどは剣を持っていましたからユダに切りつけたかもしれません。でも、誰も分からなかったのです。分かっているのはユダだけです。更にイエスはユダにパン切れを浸して与えましたが、それにはどういう意味があるのでしょうか。実は、当時この行為は、お客に対する最高の好意、まさに「おもてなし」を意味していたのです。ですから、この時ユダは、イエス様から最高のおもてなしを受けているというふうに周りからは見えるわけです。それから、この最後の晩餐のときの弟子たちの席順はどうだったのでしょう。イエスは、パン切れをユダに与えましたが、ユダはおそらくイエスのすぐ左側に位置していたのだろうと思われます。もしそうならば、主人の左側の席というのは大事な客が座る席でしたから、イエスはユダを大変尊重しておられたということになります。そんなこともあって、不思議なことに他の弟子たちは、ユダが裏切ることを最後の最後まで気づかなかったのです。それどころか、ユダがイエスを裏切るために出て行った時でさえ、祭りのための入用なものを買うためか、貧しい人々に施すために出かけたのだろうと思っていたというのです。この時の出来事は、マタイもイエスとユダの間で交わされた会話として記しています。イエスが「わたしといっしょに鉢に手を浸した者が、わたしを裏切るのです」と言い、ユダが「まさか私のことではないでしょう」と尋ねると、イエスは「いや、そうだ」と答えられたというのです。さればイエスは、ここでユダを名指ししているではないか！と思われるかもしれませんが、この「いや、そうだ」という言葉は、直訳すると「あなたが言った」という言葉になるのです。つまり「あなたの心が言っていることをよく聞いてみなさい」、「胸に手を当てて考えてみなさい」というような意味、即ちユダの自省を促している言葉なのです。ユダに、自分を見つめ直し方向を変える機会を与えようとしているイエスの愛情が示される言葉です。このようにイエスは、ユダに対しても他の弟子たちに対してと同様に、愛をもって接しておりました。ユダを名指しで非難したり裁いたりすることはしなかったのです。それどころかユダだけに分かる方法で、心の向きを変えて立ち返るチャンスを何度も何度もお与えになっていたのでした。

そして三つ目、「イエスの死」と「ユダの裏切り」の関係について考えてみましょう。「ユダが裏切らなかったら、イエスは十字架にかかっていないのだから、ユダはかわいそうだ」という見方もありますが、そうではないと思います。たとえユダが裏切らなかったとしても、イエスはローマの官憲によって逮捕され、十字架につけられていたでしょう。イエスの死は、自発的な死であり、贖罪の死なのです。

つまるところ、イスカリオテのユダに関する事実をまとめると以下のようになります。神はユダがイエスを裏切ることを予知しておられた。ユダは自分の意志でイエスを裏切ることを選んだ。ユダはイエスから愛され、悔い改めの機会を与えられていたけれども、最後まで悔い改めようとはしなかった。ユダの裏切りがなくてもイエスは贖罪の死を遂げていた。

イエスはユダに対して「しようとしていることを、今すぐしなさい」(ヨハネ13章27節) と言いました。ユダはイエスのこの言葉に従って、部屋を出て行きました。そのユダの行為によって、イエスは十字架刑に処されるのですが、それは全人類にとって、必要なことでありました。イエスが全人類の罪を背負って代わり

に磔にされたことによって、人々は罪から救われ、浄められたのです。そして十字架刑を必要としていたのは、何も人類の側だけではありません。イエスの側も、人類への愛を貫き通すために、心から十字架を必要としていたのだ、とも言えるでしょう。イエスにとってユダは、唯一無二の特別な弟子でありましたし、聖書の中でもユダは十二使徒と対比して書かれています。十二使徒は既成概念に囚われた、イエスのことを本当には理解していない人たちでありましたが、ユダだけはイエスの本当の理解者であり、最良の心の友だったのです。十字架にかけられたイエスは一度死に、三日後に甦ります。そうして人々はイエスが救世主だったことを知るのでした。ユダの裏切りはその奇跡を起こすために必要なことだったのです。イエスは、人間であるユダに「裏切り者」の汚名を着せ、自らの欲望を貫いたと言えます。その一方でユダはイエスの望むまま「裏切り者」の汚名を引き受け、この汚れきった世界にイエスを縛り付ける肉体から解放し、イエスにその愛を全うさせ、全人類の罪を背負って死ぬという快楽を体験させたのでした。いや、ユダが自己犠牲をしてイエスに尽くすことを至上の喜びと感じるだろうことを、イエスは知っていたのでありましょう。だからこそ「しようとしていることを、今すぐしなさい」と言ったのではないでしょうか。愛は、お互いの存在を至高まで高める力を持っています。二人の間にある愛は、お互いの存在を強く結び、全人類の罪さえも浄化させたのです。ユダが裏切ったのはイエスではなく、全人類でありました。自らを「裏切り者である」と欺き、イエスへの愛を貫徹したのです。「ユダのキス」は、心からの愛の証であったのだと言ったなら過言でありましょうか。

ユダの裏切りの動機

父なる神のつれなさ！？、ユダの責任論など、およそ裏切り者のユダにまつわる心情論（外野論）を前段では喧しく展開して参りましたが、成り行きついでに、ユダはなぜキリストを裏切ったかについてもう少し突っ込んで言及してみたいと思います。

キリストの12番目の弟子、イスカリオテのユダは、なぜキリストを裏切ったのでしょうか。 銀貨30枚（牛一頭の価値にも足らず）で師を裏切った謎は、やはり研究されているのでしょうか。この銀貨30枚は現在の日本円に換算すれば70〜80万円くらいの見当になるそうです。ちょっと比較してみたのですが、ベタニヤのマリヤがイエス注いだ香油が 300デナリで、銀貨約75枚になるそうですよ。マリヤのこの行為に、ユダは本当に腹が立ったのでしょう。「この香油を売って貧しい人に施すことができたのに」と言って詰っていますからね。しかし彼は、その半分にも満たない銀貨をもってイエスを裏切ってしまいます。自分の価値を認めて貰えない悲哀を感じ、もっと大きなことができると、自分の能力を信じて疑わない部分があったのでしょうか。

この張本人ユダは、言うなればイエスを教祖としたユダヤ教ナザレ派執行部の会計係だったようです。この新しい宗派の大勢の信者がイエスのところに集まってきて、イエスはユダに、みんなに食べ物を与えよなどと無理な注文をしたようですが（イエスにはできた奇跡もユダにはちょっと・・・）、しかしながらユダは、イエスをローマ帝国に反抗する政治的指導者、政治的救済者と考えていたようで、当初は素直に信じ、素直に従っていたようです。しかし、イエスはいっこうに政治的に動こうとしません。しかしてユダはしびれを切らし、失望のあまり敵にイエスを売り渡したのであろうとする説が有力です。

またこの他にも、中にはとても穿った見方もあるのです。その見方の一つには驚かせられます。何とイエスとユダの間に密約があったというのです。もしイエスが敵から無視され、相手にされないようなことがあれば、イエスは当時多く輩出していた偽予言者と同じになり、イエスの救い主としての道は閉ざされることになってしまう。だから、イエスが予告通りに捕らえて殺されるために、ユダはイエスと仕組んで、敵方に通謀したのだ、というのがその説です。しかしどうでしょうか、イエスの磔の後に、ユダが自分の行為を後悔し、貰った金を返そうとしましたが受け取ってもらえず、自ら首を吊って死んだことを鑑みれば、密約説は疑問ですよね。ユダもイエスに好意を持っていたからこそ、イエスとその集団の世話をしていたのでしょうから、愛すればこそ憎しみも深い、という構図なのかもしれません。

ユダがイエスを裏切った動機については、さらに謎が多いと思います。同じ福音書でもマルコ伝のこの箇所では、イエスを引き渡そうというユダの申し出に対して、祭司長たちが金を与えることを約束したことになっていますが、そうであればユダの裏切りは金が目当てであったとは限らないことになります。ユダは何か他の動機でイエスを裏切った可能性も残るわけです。

聖書研究では、新約聖書の四つの福音書が書かれた順番も研究がなされていますが、12使徒の中でも一番若く、イエスの寵愛を受けたヨハネによるものは記事の内容や書かれた視点から見ても一番新しいとされて

いますが、他の三つの福音書は書かれてある内容がとても類似していることから「共観福音書」と呼ばれています。この三つの福音書の記事を詳しく分析していきますと、マルコ・マタイ・ルカに共通したものと、マタイとルカだけに共通したもの、更にはマタイ独自のもの、ルカ独自のものから成り立っていることが分かりました。これらを更に詳しく分析してお互いの記事の依存関係を考えていきますと、マルコ福音書が最初に書かれたと仮定しないと、他の福音書の記事の依存関係をうまく説明できないということが分かったのです。

しかして、時系列的には後で書かれたマタイ伝では、ユダがまず「あの男をあなたたちに引き渡せば、幾らくれますか」と言ったので祭司長たちは銀貨30枚を支払うことを約束した、と記事の内容が変わっています。即ちユダの裏切りは金目当てであったと、明確に述べているのです。ルカ伝では、まずユダの中にサタンが入って裏切りを決意させ、ユダのイエス引渡しの相談に対して祭司長たちが金を与えることを約束したと、マルコの順序に従っていますが、いずれにせよ、福音書記者はみな金のことに触れていますから、ユダは金欲しさに師を裏切った卑劣な男であるとの印象を与える結果となっています。しかし、それではあまりに単純で説得力がないので、ユダの裏切りの動機について前段のような様々な推測がなされることになりました。

しつこいようですが、ユダの裏切りについては多くの疑問符が未だ明かされてはいませんので、異論、推論の類をもう少し紹介しておきましょう。その一つ、ユダはイエスに対する失望から裏切ったとする説について詳しく。ユダは熱心党的な思想の人物で、イエスこそイスラエルを回復するために神から遣わされたメシアであると期待し、すべてを投げ出してイエスの運動に身を投じたのに、イエスは民衆の期待を裏切って立ち上がろうとしない。しかしてイエスの姿勢に失望したユダはイエスを軽蔑するようになり、金と引き換えにイエスを敵に引き渡したというものです。またこんな説も。ユダにはイエスを裏切るつもりはなく、イエスを苦境に追い込めば、イエスはその大いなる力をふるって民衆のために立ち上がるかもしれないと期待したのでしたが、こと志に反しイエスは十字架刑になってしまったので、ユダは自分の行為を悔やみ自殺したとする説もあるのです。更には、ユダの行為は裏切りではなく、彼の不用意な行動からイエスの居場所が敵に悟られたにすぎないのであって、彼の失策は教団の伝承の過程で裏切り行為とされるようになったのだという説や、ユダが祭司長たちに密告した内容についても、イエスが内輪の弟子たちだけに与え、外部に漏らすことを厳しく禁じておられた秘密の教え、特にイエスの神的身分に関する発言を、イエスを告発する材料としてユダは密告したのではないかとも考える説まであって、如何にこのユダの裏切りが救いの成就に密接に関係があり、核心の一部をなしているかが分かろうというものです。何れにしても上の各論は推測にすぎないわけで、ユダの裏切りの動機は人間の魂の深い暗黒の中に閉ざされていると言えましょう。

イエスは予言者？

ここで閑話的な話を挟みます。イエス・キリストは予言者なのかについてのお話です。キリストとは、元々「油を注がれた者」という意味のヘブライ語「メシア」のギリシア語訳であり、「救世主」を指します。それが次第に、イエス・キリストという固有名詞として使われるようになったのです。紀元1世紀、ローマ帝国支配下で圧迫され、救世主を待望していたユダヤ民族の前にイエスが現れ、救世主と信じられるようになったわけですね。そのキリストをめぐって、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教を比較すると以下のようになります。

キリストは、名をイエスといいます。イエスというのは、ヘブライ語のヨシュアがギリシア語化したもので、これも「神は救う」という意味です。つまり、イエスもキリストも、ともに救世主、救済者を意味しているのです。イエスの伝道の目的は、当時の伝統宗教であったユダヤ教があまりにも厳格な律法主義・形式主義に陥っている現状を鋭く批判することにありました。彼は「律法のために人があるのではなく、人のために律法があるのだ」と主張しています。 そうして、そのような律法主議・形式主義を乗り越えるものとして、人類に対する神の愛を強調したのでした。従ってキリスト教は、いわば愛の宗教であると、その性格を特徴づけることができましょう。キリストの主張は、もう一つあります。それは神の国が近づきつつある、という主張です。この神の国に預ろうとする者は自ら改心をし、あらゆる現世的なものを超えて、この神の国を信じなければならない、とキリストは宣教したのです。ところがキリストが、自分自身を神の子であり、メシア（救世主）であると認識していたかどうかは、疑問です。言うなれば、キリストを神の子であるとする信仰は、彼の死後間もなく弟子たちのあいだで芽生えてきたものであり、キリスト教というのは、実を言えばこのイエス・キリストなる存在を神の子と信じることから始まるものなのです。

旧約聖書と新約聖書がキリスト教の聖書ですが、ユダヤ教では旧約聖書のみを聖書としています。キリスト教では、イエスは神の子とされていますが、ユダヤ教では、キリストは単なる田舎者のラビ（先生）にすぎません。つまり、キリストを「人間」と見ているわけで「神」とは見ていません。また、イスラム教から見れば、キリストはムハンマドの直前に出現した一人の「予言者」なのです。 即ちアッラーの神は、この世の中に多くの予言者を遣わして人類に悔い改めるように警告されましたが、イスラム教徒も認めている旧約聖書のイザヤ、エレミヤ等の予言者が現れても人類はいっこうに悔い改めません。そこでアッラーは、イエス・キリストを予言者としてこの世に遣わしたのですが、人類の大半はイエスの予言を無視しました。そうなれば、本来なら神は全人類を殲滅されてもよいのでしたが、慈悲深いアッ　ラーは最後にもう一度だけ人類にチャンスを与えたというのです。即ち最後の予言者としてムハンマドが選ばれ、ムハンマドを通して人類にコーランを啓示された、これがイスラム教の考え方です。まとめてみますと、イエス・キリストをどうみるかですが、ユダヤ教からみればただの人、キリスト教からみれば神の子、イスラム教からみれば予言者の一人となりますね。実に興味深いと思われませんか。

各宗教の祈りとは

そろそろ閑話休題と行きたいところですが、閑話的な話をもう一つ。各宗教における祈りの意義について触れておこうと思います。

まず前段でもお話ししましたが、キリスト教における祈りは、神への賛美を本来的な形とするものであり、祈願・罪の告白なども究極にはそれによって神の栄光が顕わされることを願うのであって、現世利益は本来的なキリスト教の信仰が追求するものではないとしています。祈りの意義の最大のものは、永遠なる神との人格的な交わりにあるとされることに、キリスト教が単なるご利益宗教ではないと言われる所以があります。

一方、例えば神道においては、神への日常的な祈りは「拝む」と形容されることが多く、参拝や礼拝が行われています。この際、お辞儀をして拍手を打つ二拝二拍手一拝を行うことが最も一般的ですが、時には神前への玉串拝礼などが行われ、改まって利益や加護を願う場合は祈祷・祈願などを行い、その際は神職による祝詞の奏上や祓などが行われます。祈願祈念は五穀豊穣、大漁追福、商売繁盛、家内安全、無病息災、安寧長寿、夫婦円満、子孫繁栄、祖先崇拝、豊楽万民、天下泰平の招福祈願、厄除祈念や「払い清め」に纏わることなど多岐に渡るのです。祈りと言ってもいろいろありますが、日本人の祈りで多いのは現世利益のお願いですが、現世利益を願うのは品がないようにも見えますので、神道に限らず仏教でも、日本の宗教家の中では現世利益について高らかに言うことを避ける人もいます。しかし、古代から現代まで日本人の宗教の歴史を見ていきますと、ずっと現世利益が基本であることが分かります。中には神などいない、祈っても効果なんかない、という偏屈な人もいますが、自分が病気になったり、あるいは大切な人が瀕死の床についたとなると、何でもいいから助けてくれるように祈ります。でもそれは自然なことですよね。

しかし神道においてはお願いをするばかりではありません。お願いが叶った時には必ず感謝が行われるのです。例えば、米が実って収穫した際にはまずそのお米を神さまにお供えします。それをお初穂といい、お供えがお金に代わった現在でものし袋に御初穂料と書くのはその名残です。神社で秋祭りが多いのは収穫祭の意味があるからですが、祭りを行うことで神さまに感謝を捧げ、また喜んで戴いているのです。神も人も楽しみ喜ぶお祭りです。祈願と感謝、この二つが神道、というよりも日本人の宗教思想の基本なのです。

仏教では、仏の力で病気や災難から助けてもらえるように僧侶が加持を行なう宗派がある一方、個人的に「願」を掛ける（願掛け）ということを行うものもあります。仏さまに救いを祈ることは当然あります。僧侶・仏教学者の中には仏教の原理ばかりを説いて、既成の仏教の教えを否定する人がいますが、仏教は思想や哲学ではありません。仏さまを信じて仰ぐという信仰を持って人を救うのです。仏教の本質は、自分の心の改革ですが、そこに至るまでには、さまざまな方法・手段があります。それを「方便」といいます。世俗のことわざに「嘘も方便」というのがありますが、方便は嘘ではありません。方便は真理を悟らせるための大切な方法論なのです。そして実体のない真理を体得に導く方法だからこそ、真理と方便は表裏一体の関係であると仏教では説いています。ですから仏さまの救いを祈ることは、目的さえ間違わなければ教義に則していることなのです。大切なのは、今、自分がどのような生き方、信仰をすれば、心の改革ができ幸せになるかの目的への方向性です。方便は、同じ方便であっても、その時の状況によって、真実であったり、間違いであったり、定まりません。例えば、ある薬（方便）が風邪に効くからといって、他の病気にも効くとは限らないのです。それぞれの人にあった方便が必要になります。仏さまを拠り所にすることが信仰を充実さ

せて幸せに導く方法なら、縋るお祈りも大切な方便だと仏教では説いています。でも祈っているから救われるのだ、それだけでいいということになりますと、祈りの目的がずれてしまいます。仏さまの救いに安心を得ながら、どうすれば自分の心を磨き仏さまのお心に近づくことができるかの修行をしていくか、そのことを忘れなければ、あなたの祈りは大切な方便即真実だと呼びかけています。

イスラム教では、ユダヤ教やキリスト教と同様に偶像崇拝が厳格に禁止されているため、イスラム教の聖地であるサウジアラビアのメッカに向いた所定の方角にひれ伏すことで祈りは行われています。これは一種の生活習慣的な位置付けもあり、毎日決まった時間に祈りが捧げられるのです。礼拝をするための専用の絨毯もあり、特に方角を重視することから、方位磁針も利用されることもあります。またイスラム教においては、信徒が頭をひれ伏す対象はイスラム教の神であるアッラーのみであるとされ、アッラーではない人間に対して頭をひれ伏してはならないとされています。

お祈りは宗派にとらわれぬ宗教の基本的な行動の一つです。人間を超えた存在に対して念を送ることを繰り返し、それを言葉にする宗教もありますが無言の宗教も存在するのです。その人間を超えた存在を神さまと総称しています。この祈るという内容は、神さまへの賛美（神さまの考えることや行動、作ってきたものに対して敬意を払うこと）、そして感謝の気持ちを伝えることなど、たくさんあります。どの宗教でも祈りは最も重要な行動になりますが、キリスト教の最大の特徴はイエスも祈ったように、自分の願いのままの成就ではなく、たとえそれが自分に苦しいこととなっても、神さまの御心がなされますようにと祈ることです。神のみこころを第一に考える。これがキリスト教の本質です。

第１部終曲コラールについて

第1部の終曲には、初稿（1727年）ではヨハネ受難曲と同じように、ホ長調の単純な四声コラールが設えられていましたが、1736年の第2稿改訂版では、バッハは1725年のヨハネ受難曲第2稿、変ホ長調の冒頭楽曲をホ長調に移調した大掛かりなコラール・ファンタジーに置き換えています。これが今日我々が知るマタイ受難曲第1部の終曲です。この1曲にはイエス・キリストの一生が凝縮されているだけでなく、これから第二部で起こることをも予測していますから、それはあたかも膨大な新約聖書の物語をこれだけの字数で要約しているともいえましょう。それはこういうくだりです。

（人間の罪の大きさを提示）おお人よ、お前の大きな罪をなげくがよい。（キリスト降臨の謂れ）それゆえにキリストは父のふところを出て、地上へと下ったのだ。（イエス降誕）清くやさしいひとりの乙女から、彼は私たちのためにお生まれになった。（イエスの奇跡）彼は人と神の仲立ちをしようとされ、死者たちに命を与え、すべての病を除かれた。（イエスの受難）しかし時は押し迫り、彼は私たちのためにいけにえを捧げられ、私たちの罪の、重い荷を背負わされた。十字架につけられて、長いこと。

オーケストラも各パートの緻密な掛け合いをし、雄弁に物語ってすばらしい。低弦にはジャズを思わせる旋律が繰り返し反復され、あれっと思われる人もいるかもしれません。しかし、前曲の最後の聖句「弟子たちはみな、イエスを見捨てて逃げてしまった」という歌詞を受けて歌われる割には長調の曲であり、前々曲のような「怒り」はもう聞かれません。それどころか、オーケストラの伴奏に絶えず出てくる16分音符二個ずつの連続する音型は「すすり泣き」のモチーフといわれ、聴く人は自分のうちに裏切り者のユダや弟子たちの心境、姿を見出すことになります。何れこのコラール・ファンタジーは、冒頭合唱曲と規模においても匹敵する大曲であり、1736年ザクセン選帝侯（ドレスデン）から宮廷音楽家に任命されたバッハが、マタイ受難曲の浄書総譜を仕上げるにあたって、益々の地位保全を求めて力作として差し替えた気持ちが痛いほど分かるというものです。

コラールは、バッハの作曲ではなくプロテスタント・ルター派の教会で好んで歌われていた「祈りの歌」です。受難曲はイエスという歴史上の人物の物語なのですが、コラール変奏曲を配置したり、単純四声コラールを挟むことで、聴き手の方は「現代の問題」として祈りを捧げながら聞くことになります。バッハの眼力、意図するところの魅力の虜に、コラールは誘ってくれるのです。

マタイ受難曲 全曲演奏会 盛岡公演

令和２年 5月6日（水・振休）

岩手県民会館 大ホール

指揮　佐々木正利　　管弦楽　山形交響楽団

合唱　盛岡バッハ・カンタータ・フェライン　ほか

合唱出演者募集

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインでは、左記演奏会に共に出演する会員を募集しています。合唱・音楽が好きな方、年齢、経験、高校／大学／社会人問わず歓迎いたします。まずはお気軽に見学にお出でください。

◆練習日時：毎週火曜日　　午後6:30～9:00
　　毎月１回日曜日午後1:30～5:00

◆練習場所：内丸教会（毎週火曜日、日曜は不定）

◆お問い合わせ：019-651-4646（佐藤）/mail@mbkv.jp

FB　Twitter